

ちいさな みずたまりに
ちいさな かみの おふねが うかんでいました。
さやさや かぜが ふくたびに、
みずたまりに さざなみが たちます。
そこで おふねは
ふかりふかりと たのしく ゆられていました。



まんまる めだまの カエルが にひき、
きしから おふねを みていました。
「ケロ！ ケロケロ！ ケロケロケロ！」
と いっぴきが いうと、
「ケロケケ、ケロケケ」
と もういっぴきが こたえます。
カエルの ことばで こう いったのです。
「みて！ あれは なあに？ どこから きたのかしら？」
「また にんげんが ゴミを なげこんだのさ。」
それを きいて、おふねが いいました。
「ほくは おふねだよ。たびに いっておいでって、
みずの うかべてもらったんだ。」
でも、カエルたちは きょとんとしています。
「ケロケロ、おふねだって？ ケロ、いったい どこが？
ケロケロ、どうして おまえが おふねなんだよ？」
「どうしてかって？ みずの うえを すすむからさ！」
おふねは みずたまりの はしから はしへ、
すいーっと すすんでみせました。
「ケロケロ、なら わたしも おふねよ！」
「ケロケロ、ほくも おふねだ！」
カエルたちは ほちゃんほちゃんと みずの とびこみ、
しぶきを あげて およぎはじめました。





そこへ、はいいろガモが とんできました。

「グワッ グワッ、あんたたち なにしてるの？」

「カモさん、こんにちは！」

カエルは そう いいながら、ようじんして ちょっと あとずさりしました。

「ケロケロ、ほら こいつが じぶんは おふねだって いうんです。」

「グワッ グワッ！ あたしは ずっと まえに、
みなみの くにて ふねを みたことが あるわ。
ほんものの ふねよ。うみに うかんでいたわ。」

「うみって なんですか？」

おふねの むねが ときどきしはじめました。

「グワッ グワッ。いーっばい みずが あるところよ。」

「ここよりも たくさん？」

カエルは おどろきました。



「グワッ グワッ! うみには たっくさん みずが あって、それが とおくで そらと つながってるの。」


ほくも ほんものの ふねに なりたい、ぜったい なるんだ!
かみの おふねは そう こころに つよく きめました。
「カエルさん さようなら! ほくは うみに いくよ!」





でも カエルは だんだん おくれて みえなくなりました。
おふねは ひとりで すずんでいきました。

みずたまりから ちょろちょろ おがわが ながれでていました。
おふねは その おがわを すずんでいきました。
カエルも おふねに つづきます。
「ほくたちだってさ、ケロケロ、おふねなんだから！」



おがわは しだいに ひろくなっていきます。
「すごい！ みずだらけだ！ きっと これが うみなんだ！」
おふねは うれしくなって こえを あげました。
すると、
「シー！ シャベる ときは ちいさい こえてって おそわらなかったのか？
それに、きゅうに うごくなよ。びっくりして さかなが にげるだろ。」
そう いったのは、つりざおを たらした ふるぼけた ポートでした。
「すみません、これは うみですか？」
おふねは どぎまぎしながら たずねました。



「知らないよ。そんなの きいたこともない。さあ、もう あっちに いけよ。
さかなを おどかすなって いってるだろ！」
ポートは ふきげんそうでした。